人、仕事を持っている人、子どもや孫の世話がある人など、忙しい方が多いから、このシステムは便利なようだ。

会費なし、会則なしの自由参加が出来る仕組みであるが、毎年九月に行う短歌イベントの会場を借りるため、歌会の度に参加費一人二ユーロを積み立てている。

かつて服部さんが俳人を引っ張り込んだように、私はシャンソン教室の友人達を誘って、短歌初心者も増えた。短歌は何も知らないから、と言う人でも一首くらいは自分の好みの歌があるだろう、と希望者が自分の選んだ一首を二分間以内に紹介する「私の好きな一首」の時間を設けた。すると、様々な歌が並び、私にも勉強になる。二分経ったら、タイマーが鳴る仕組みにしたのは、概してフランス在住の日本人はフランス人並みにお喋りだから、一首で三十分も話しそうな人達がいるからだ。

幸い、初心者だけでなく、日本で短歌結社に入っている方々がご主人の赴任や留学に伴ってパリに在住する間、歌会に参加して良い刺激を与えてくださるし、リヨン在住の松本実穂さんも度々パリに足を運んでくださる。そこで、短歌結社に入っている方々に交代で勉強会を開いていただくことにした。お陰で、私も勉強させてもらっている。

最近「私の好きな一首」に「心の花」誌から選ばれた歌が登場するようになった。パリ短歌クラブにお送りくださった月刊誌を皆さんが丁寧に読んでいるのです。ご援助を心から感謝いたします。

桐谷文子　初冬のある日、佐佐木朋子さんから一通のメールをいただいた。津田塾大学所蔵の松村みね子（片山廣子）訳でバーナード・ショーの戯曲『船長ブラスバオンドの改宗』の本のコピーを持っているけれど、それに桐谷蔵書と印が押されている。もしかしたら私の父が津田塾大学に寄贈したものではないかという内容だった。私はすぐに、父が持っていたものに違いないと確信した。購入した本に蔵書の印を押していたのは、鮮明に覚えていたし、桐谷という姓は、それほど多くない。津田塾大学と父との関係は、父亡き今は、わからないが、きっと父の書架にあったものだ。父と片山廣子がこんなところで結ばれていたなど、思いもよらないことだった。父からの伝言を受け取ったような思いで、メールを何回も読んだのだった。それで、ふと思い出したのが、父から譲り受けた『ラッカーボックス』という黒の絹張りの和綴じの本。当時「心の花」に入会したばかりだったが、佐佐木信綱と斎藤茂吉の序文なので、父にねだって私のものになった。著者は安田蕪村、本名安田健、発行は昭和二十七年。上代から、現代までの和歌、短歌百余首を英訳したものだった。パラパラと見て、そのまましまいこんでいた。今あらためてゆっくり読んでみたところ、今回、金櫻神社の境内に建立される信綱の歌があり、あっと思ったのだった。他、残念ながら片山廣子の歌はなかったが、佐佐木弘綱、石榑千亦、川田順、木下利玄、柳原白蓮、九条武子が掲載されている。信綱の序文の末尾には、「安田君がこの小箱に籠めて世界の人々に贈られる寶石の一つ一つに、自分の長い間の夢もまつはるものであると思へば、わがことのやうに欣ばしく、その公刊が待ち望まれることである。」とあるので、外国人向けに出版されたものだろうと思う。そのような本を父は何故持っていたのかを聞いておけばよかったと悔やんでいる。著者と佐佐木信綱との関係、そして著者はどのような人だったかを知りたいのだが、わからない。もし、ご存知の方がいらしたら、ご一報いただければうれしい。

あの本の山から、この一冊が私の目にふれた不思議。桐谷の蔵書印のある松村みね子訳の本のご連絡。短歌の知識が無にひとしかった私は、結社を選ぶ事もなく、偶然のように「心の花」に入会した